

モーツァルト／クラリネット協奏曲 イ長調 K.622

モーツァルト時代のクラリネットはまだ歴史の浅い楽器で、オーケストラには定席をもっていなかった。モーツァルトは15歳のときにその魅力に惹かれ、さっそくイタリア旅行中に書いた《ディヴェルティメント 変ホ長調》(K 113)で用いている。やがてウィーンに移り住み、フリーメイソンという秘密結社に加わると、そこで三歳年上のウィーン宮廷楽団のクラリネット奏者、アントーン・シュタートラーと親しくなって、次々とバセットホルンとクラリネットのための作品が生み出されていく。

クラリネット協奏曲が完成したのは1791年、モーツァルトが亡くなる年である。彼はこの年に膨大な量の作曲をした。変ロ長調のピアノ協奏曲(K 595)に《魔笛》と《ティトゥスの慈悲》という大きなオペラを二つ、レクイエムのかなりの部分と室内楽、合唱曲など、数多くのジャンルの作品を10ヶ月あまりで書き上げたことになる。ピアニストとしても、公には3月に最後のステージを終えたが、プライベートには愛好家の前で演奏を続けていた。猛然と創作力が高まり、11月20日に病で床につくまで、休まず筆を走らせる。クラリネット協奏曲の完成は10月7日。その2、3年前に作曲された199小節だけのバセットホルンのための協奏曲楽章を編曲し、さらに二つの楽章を書き加えて仕上げたものである。澄みきった情感は死を目前にした精神の浄化と解釈されることも多いが、むしろ、数年前からモーツァルトの作風に現れていた静謐さと哀感がこの曲に溶け込んでいると考えるべきだろう。

全体は3楽章からなる。規模の大きな第1楽章アレグロはソナタ形式で、とくに展開部はオーケストラが華麗な独奏と密接に呼応しながら、転調を繰り返していく。再現部は定式どおりで、カデンツァはない。静かに語るような趣の独奏ではじまる第2楽章アダージョは、簡潔な三部形式。こうしたシンプルなメロディを穏やかに歌わせているところから「浄化」のイメージが生まれるのだろう。第3楽章アレグロはロンド形式。軽やかな跳ねるリズムが特徴の主題が4回、繰り返される間に、別の楽想が挟まれていく。クラリネットのすばやいパッセージが映えるフィナーレである。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。